様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 29 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１３２００２５
研究課題名（和文）　世紀交代期中国の文化転形に関する言説分析的研究

研究課題名（英文）Discourse Analysis of China's Cultural Transformation around the turn of the Cencury

研究代表者
砂山　幸雄（SUNAYAMA YUKIO）
愛知大学・現代中国学部・教授
研究者番号：00236043

研究成果の概要（和文）：本研究は、市場経済化の急速な進展によって大きく変容を遂げつつある中国について、文化の側面から変化の内容と方向を探求することをめざしたものである。言説分析の方法により、主として 1990 年代以降の政治、思想、イデオロギー言説、文学作品や文化批評を分析し、従来から存在していた近代と反近代（近代批判）、グローバル化と土着性の対立に加え、近年では近代性内部の諸価値相互の対立が顕著になっていることを明らかにした。また、それが中国政治の展開、社会の変化といかに密接に関連しているかを考察した。

研究成果の概要（英文）：This research aims to analyze cultural change and foresight in China, which has been greatly influenced by rapidly growing market economy. Focusing on ideological discourses mainly in politics, thought, literature, and cultural criticism since 1990s, we reveal that conflicts between modern and anti-modern (criticism against modern), globalization and indigenization, and various values within modernity, have become evident, and show how they have much to do with political and social transformation in China.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
２０１０年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２０１１年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
総　計	12,200,000	3,660,000	15,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：文化転形　グローバリゼーション　ナショナリズム　自由主義

１．研究開始当初の背景

改革開放時代の中国に対する日本の研究者の主要な関心は、急速な成長を遂げてきた経済の諸側面、それによって引き起こされた所得格差の拡大などの社会変動、「六四」天安門事件後も変わらずに維持されてきた共産党一党支配体制などに置かれてきた。そのため、経済学、社会学、政治学の領域では多くの研究が蓄積されてきた。

しかし、今日の中国は思想・文化面のからも分析されなければならない。中国では、改開放制作への転換以降、とりわけ 1990 年代以降、市場経済化とグローバリゼーションの進行により文化領域でも大きな変動が起こ

っており、しかも従来の二極イデオロギー的分析や、伝統／近代二分法的分析によっては捉え難い複雑な局面が現出している。こうした文化転形の方向性が今後の中国の行方をも左右する重要なファクターになりつつあることは、中国観察者の多くが気づき始めていると言ってよい。

本研究は、研究分担者の一人である尾崎を中心に東京大学東洋文化研究所の「1990 年代中国の中国思想文化研究班」として 10 年以上にわたり続けられてきた研究活動の一つの仕上げとして構想されたものである。研究代表者の砂山はこの分野では日本でも数少ない専門研究者であり、研究分担者の尾崎、坂元、村田、高見澤らもそれぞれ中国近代の文学、思想史、法制史等の専門領域を持ちながら今日の中国の思想・文化領域の変動に深い関心をもって、定期的に学際的な研究会を開催してきた。しかし、この間に関心対象であった「改革開放期中国の思想・文化」という領域自身が、以下の２（研究の目的）で述べるように、すでに一つの歴史的段階を画するような展開を示すようになったことを踏まえて、本格的な共同研究として立ち上げることになったものである。

２．研究の目的

本研究が「世紀交替期中国の文化転形」を研究対象として掲げた大きな理由は、文化・思想面から見て「改革開放時代の中国」をもはやひとくくりの時代として扱うことが困難になったことにある。経済や政治の領域では「改革派」と「保守派」という二大区分が今でも一定の有効性を保っているが、文化・思想面でこの区分が意味を持っていたのは 1990 年代前半までといってよい。それ以降は、市場経済化とグローバル化のもたらした新しい局面を前にして、いずれの陣営でも複雑な内部分裂や思想的転換をとげ、いまなおその変動は続いているように見える。このような状況を可能な限り正確に把握し、これを中国近現代に出現したさまざなま文化・思想潮流のなかに位置づけることが本研究の大きな目的である。この目的をさらに具体的に示すと以下のようになる。

（1）今日の知的諸潮流に関する分析

1990 年代後半の「新左派」・「自由主義派」のあいだで繰り広げられた論争はすでによく知られるようになったが、それ以後の状況については、日本ではあまり知られていない。胡錦濤政権（2003-2012）の発足時には、知識人層から改革への大きな期待が寄せられていたこともあり、この期間の知識人の思想動向は政治の動きとも関連づけて理解する必要がある。

（2）過去の思潮との対比、関係

今日の知的状況は、インターネットの普及の結果として、リベラリズムであれ、新左派的な思想であれ、グローバルな思潮が直接的に中国の思想に影響を与えている。しかし、それらを受入れる中国の文化的土壌は、近現代の中国の歴史に強く規定されている。今日の中国知識人たちは、海外の新思潮を受容する際にも、過去の思想的営為・遺産を参照するのが常である。３年間の研究助成期間には、「六四」天安門事件 20 周年、改革開放 30 周年、中華人民共和国建国 60 周年、五四運動 90 周年、辛亥革命 100 周年という区切りの年がめぐってきた関係で、とりわけこれら歴史的事件をめぐる言説のなかに今日の思想状況が色濃く映し出されているものと思われる。歴史的関連性を重視する所以である。

３．研究の方法

本研究は「言説分析」を主要な方法とするため、基本的には文献の収集、整理、分析が中心となる。しかし、現代中国の文化・思想にかかわる文献は書籍・雑誌・新聞だけにとどまらない。インターネット上に流通する膨大な情報もまた重要な第１次資料となる。とりわけ、かつてより緩くなったとはいえ、依然として検閲制度が残る中国では、インターネット上の言説は、活字メディア上の言説より自由な意見表明の場として、格段に重要性を増している。そのため、中国国内の協力者の助力も得て、インターネット上でとりわけ影響力のあった言説の収集にも務めた。

もう一つの方法は、当事者（思想家・学者）との直接交流である。中国知識人の文章は検閲への配慮から、真意を十分書き表さない場合が多い、また、海外で発表される文章やインターネット上に掲載する文章であっても、国内の政治的、文化的コンテクストに依存して書かれることが多く、容易に理解できない場合がある。そのため当事者との直接交流の機会を設け、多方面にわたり意見交換を行なうことが研究にはきわめて有益であり、また不可欠の作業である。かれらの大部分は大学に籍を置く研究者であるので、一般的な研究交流の形態をとるが、我われにとって彼らは研究対象でもあり、研究交流は同時にインビュー、ヒアリング作業にも相当する作業である。これによって、彼らの言説を深く理解することができる。本研究プロジェクトでは、毎年、中国・米国に住む当事者たちとの交流をシンポジウム形式で行なった。東京で２回、上海で１回開催し、「自由主義派」、「新左派」双方と直接交流した。

４．研究成果

（1）今日の知的諸潮流に関する分析

現代中国の知的諸潮流と言論を観察するとき、中国共産党内の動向と党外の動向とを見る必要があるが、党内の動向は基本的に閉

ざされていて観察できない。そこでチャイナウォッチャーたちが香港などにリークされた微少情報をもとにいろいろ推測をすることになる。

しかしながら、胡錦濤ら中国共産党現指導部はそれまでの指導者たちとは異なり、世論の動向に注意し、党外の学者からの意見聴取も頻繁に行うようになっていた。また党外の議論が党内の議論の延長としてなされていると思われる場合もあり、逆に公開の議論が党内に反映されていることもあるように見える。総じて、インターネットを含む公開された言論は、中国共産党への影響も含めて、社会統合に大きな役割を果たすように変わってきている。それは例えば、ネットに表われる強い民族主義傾向が外交政策を揺さぶっていることを見ても明らかである。従って、公開された言論空間での知的動向の分析は、現代中国をできるだけ正確に認識するうえで不可欠となっており、しかもそれはより幅広い文化動向に支えられていることから、視野を広げてなされる必要がある。

この数年の言論空間で顕著なのは、一面では経済的成功を背景とした大国意識の興隆であり、それに比例する反米感情の高まりであった。他面、拡大した社会格差、そして官僚を含む既得権層の腐敗への怒りである。それらの主要関心をめぐっていくつかの思想的立場の異なる言論が展開された。

20 世紀末に始まった「自由主義派」と「新左派」の論壇を二分する大論争は 21 世紀初頭に低調化していたが、2004 年以後の胡錦濤指導部の社会格差是正への強い関心と意思とから、それまでの「自由主義派」の言論は急速に社会的効力を失い、多くの論者は経済的自由主義と自己とを区分けして社会公正をも重視するように立場を移動させた。一方、格差の現実への怒りを背景にして社会主義時代への郷愁を表す思潮も表面化した。彼らは改めて旧左派と呼ばれるようになったが、つい最近の薄熙来事件発生まで，共産党員の多くの部分を巻き込む潮流を形成した。つまり、それまでの「自由主義派」は経済自由主義派（広州を中心地とする）と政治自由主義派（それにも古典派とより公正に重きを置く流れとがある）とに分かれ、「新左派」のほかに「旧左派」が再登場し、さらに国家政策を主導している既得権層（政治と経済の主要指導層、そのなかにも複数の傾向があり、経済自由主義派や旧左派の一部も含まれる）の保守派がある。これらの国内の利益配分を巡る立場の違いに加えて、さらに台頭する中国を包囲しコントロール下に置こうとするアメリカの強い圧力に直面して生じた反米・反包囲感情があり、民族主義的色彩を強める軍の意向も強い。この要素はそれぞれの政治的立場に異なった方向性を与えており、非常に複雑な状況を呈している。

この数年、議論のテーマとして大きく扱われてきた「中国モデル論」とそれに連動した「普遍価値論」はそのような各種政治的立場の交差する論点であった。「中国モデル論」は，自由主義派以外のほとんどに支えられて主張され，自由主義派はそれを「普遍価値論」によって批判したのだが、共産党内部にもその意見の分岐が反映された。欧米とは異なったモデルで中国独自の近代化が進んでいるとする議論は、当然にも欧米とは別種の大国を形成しつつあるとする議論となり、その正統性を支える社会倫理として儒教が脚光を浴びることにもなった。

新左派の一部は「中国モデル論」を批判すると同時に、19 世紀末以来の長期的な文化変動における民族の経験を再思索して新たな歴史観を創造するように訴えてもいる。

上述のような新たな中国文化・思想界の動向の分析にもとづき、日本の読者のために典型的な議論を翻訳・紹介するべく、現在、岩波書店の雑誌『思想』で特集号を組む企画を進めている。全ページを使っての特集になる予定で，現在６人の論者の論文の選考と翻訳の手順を準備している。本年秋から冬にかけての刊行になるはずである。

（2）過去の思潮との対比、関係

上述したような今日の中国の知的諸潮流を分析する過程で、各潮流が自らを中国近現代史上に足跡の残る各種潮流の継承者であるかのように、中国近現代思想史の見直し作業をおこなっていることが浮き彫りになった。

例えば、「経済自由主義派」にシンパシーを感じる学者たちは、陳序経に代表されるようなハイエク的な原理主義的自由主義の潮流に着目して、その歴史的意義を強調したのに対し、同じ自由主義派であっても、「公正」を重んじるグループは、中国のリベラリズムのメインストリームが、陳序経らの潮流ではなく、むしろ胡適から羅隆基へと連なる社会民主主義的な潮流によって代表されると考えて、実証的な研究を行っている。

一方、「新左派」の側は、毛沢東的な社会主義実践のなかに息づいていた社会的平等や幅広い政治参加への志向を再評価しようとするのに対して、復活した「旧左派」は、同じく毛沢東時代を旗印として掲げながらも、毛沢東の「大国化」「強国化」への志向の継承をめざしているように見える。

このような今日の中国知識人による過去の思潮との対比、関係の追求は、本研究プロジェクトの複数名が関わった『新編原典中国近代思想史』全７巻（岩波書店）の編集・刊行作業において、文献の取捨選択とその歴史的評価を行なうに際して参照されており、本プロジェクトの重要な副産物となった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３１件）

① 砂山幸雄、2010 年の動向―思想、中国年鑑、査読無、2011 年版、2011、202-204
② 砂山幸雄、排日教科書と歴史認識問題、東アジア近現代通史、査読無、第５巻 2011、388-389
③ 尾崎文昭、魯迅還是値得読下去（中国語）文芸報（北京:中国作家協会）、査読有、2011、11
④ 尾崎文昭、竹内好的《魯迅》与《魯迅入門》（中国語）、区域：亜洲研究叢刊（北京：清華大学出版社）、査読有、 第１輯、2011、370-408
⑤ 尾崎文昭（薛羽整理）、戦後日本的魯迅研究（中国語）、現代中文学刊（上海：現代中文学刊雑誌社）、査読有、 総第12期、2011、49-56
⑥ Murata Yūjirō,The Regional Structure of the 1911 Revolution: The North and the South in Chinese History,Journal of Cultural Interaction in East Asia, 査読有,vol.3,2011,7-18
⑦ 村田雄二郎、看辛亥革命在中国歴史上的位置――辛亥百年、読書（北京）、査読無、総 389 期、2011、96-106
⑧ 村田雄二郎、 晩清“国語”問題与単一語言制：以政治外交為中心、区域：亜洲研究論叢（北京：清華大学出版社）、査読有、第１輯、2011、145-170
⑨ 石井剛、知識生産・主体性・批評空間－汪暉『現代中国思想的興起』日文簡本“訳者解説”（中国語）、開放時代（広州）、査読有、232 期、2011、137-148
⑩ 石井剛、敢問“天籟”：関於章太炎和劉師培哲学的比較研究（中国語）、開放時代（広州）、査読有、228 期、2011、57-69
⑪ 佐藤普美子、新詩のテクストと享受方式――長詩「北遊」の場合、お茶の水女子大学中国文学会報、査読有、30 号、2011、131－139
⑫ 加治宏基、中国的世界遺産政策与民俗文化、国家与民俗（中国語、中国社会科学出版社）、査読有、2011、80-91
⑬ 尾崎文昭（段美喬紀録）、従《魯迅》到《魯迅入門》:竹内好魯迅観的変動（中国語）、魯迅研究月刊（北京:北京魯迅博物館）、査読有、2011、91-96
⑭ 村田雄二郎、日本の対華二ヵ条要求と五四運動、岩波講座　東アジア近現代通史 戦争と改造の時代――1910 年代（岩波書店）、査読無、第３巻、2011、324-343
⑮ 高見澤磨、調停から見る中国近世・近代法史、調停の近代（勁草書房）、査読無、2011、239-273
⑯ 尾崎文昭、竹内好の『魯迅』と『魯迅入門』、未名、査読無、第 28 号、2010、97-144
⑰ 坂元ひろ子、沖縄の歴史において共生アジアを模索する、人文科学（延世大学人文学研究院）、査読無、92、2010、53-70
⑱ 高見澤磨、中国民法の総論的分析序説、ジュリスト、査読無、1406、2010、111-115
⑲ 高見澤磨、社会転型中的法律変革―以日本為例（中国語）、政法論壇（北京：中国政法大学報）、査読無、28 巻１期、2010、168-173
⑳ 石井剛、“道之生生不息”的両種世界観：章太炎和丸山真男的思想及其困境（中国語）、中国哲学史、査読有、第 1 期、2010、106-120
21 石井剛、「文化心理構造」と章炳麟－李沢厚の批判に関連して－、ODYSSEUS、査読無、14、2010、35-58
22 佐藤普美子、『セーヌ河の少女の面影』を読む、幕、査読無、71、2010、20－22
23 菅原慶乃、「インディーズ映画」という言説空間の誕生、中国文芸研究会会報、査読無、344 号、2010、1-6
24 晏妮 、戦争記憶和社会性別―1945-1949 年電影中的女性・都市表象、影視文化、査読無、2010、155―161
25 加治宏基、世界保健機関への参加をめぐる決定要因――台湾の WHA オブザーバー資格取得を事例として、愛知大学国際問題研究所紀要、査読無、134、2010、128-138
26 加治宏基、国連開発ディスコースの中国による受容と政策展開、ICCS 現代中国学ジャーナル、査読有、第２巻、2010、283-290
27 砂山幸雄 「思想解放」と改革開放、現代中国、査読無、83、2009、19-33
28 尾崎文昭、也還是所謂対于将来的希望（中国語）、読書（北京：三聯書店）、査読無、10 月号、2009、161-163
29 尾崎文昭、詩性学術思惟と詩性学者、九葉読詩会、査読無、第４号、2009、158-165
30 Sakamoto, Hiroko、Creation of New Networks of Plural Identities：Learning from the History of Early Globalization、Trans-Humanities、査読無、Vol.1、2009、39-61
31 村田雄二郎、（解題）呉重慶「孫村　ある共時的コミュニティー」、思想（岩波書店）、査読無、1026 号、2009、104-107

〔学会発表〕（計２４件）

① 石井剛、實踐的思想，思想的實踐：有關個體生存的追問及“我們的時代”（中国語）、台湾大学哲学系講演（招待講演）、

2012年2月20日　　台湾大学（台北）

② 砂山幸雄、解読賀桂梅“文化自覚与新世紀之交的“中国”叙述（中国語)、国際シンポジウム「中国アイデンティティの模索―中国価値論と文化自覚論再考」、2011.12.18、東京大学東洋文化研究所

③ 村田雄二郎、Early Modern China and the 1911 Revolution: From the Perspective of Japanese Historiography,CHINA AFTER EMPIRE:1911 and its AFTERMATH, 2011.11.3-5,Boston:Harvard University

④ 佐藤普美子、観看風景、精神中国：第一届後毛（ポスト毛沢東）時期文学国際学術研討会、2011.10.12、香港城市大学(香港)

⑤ 晏妮、戦後的中日電影交渉―連続与断裂清華大学主催セミナー「日本映画講座」、2011.9.11、清華大学（北京）

⑥ 尾崎文昭、『学人』に関する調査報告、科研費「世紀交代期中国の文化転形に関する言説分析的研究」2011年第２回研究会、 2011.7.18、東京大学東洋文化研究所

⑦ 村田雄二郎、近世中国と辛亥革命、人文・社会科学高等研究所講演会、2011.7.12、清華大学（北京）

⑧ 尾崎文昭、両次世紀之交期的“文学”概念的変化（中国語)、両次“世紀之交”：現代中国思想文化転型国際学術研討会、2011.5.22、華東師範大学思勉人文高等研究院（上海）

⑨ 坂元ひろ子、歴史上的“人種・民族／国民・市民（公民)”概念（中国語)、両次“世紀之交”：現代中国思想文化転型国際学術研討会 、2011.5.22、華東師範大学思勉人文高等研究院（上海）

⑩ 村田雄二郎、 編訳『新編原典中国近代思想史』七巻本的基本思路及其特点、両次“世紀之交”：現代中国思想文化転型国際学術研討会、2011.5.22、華東師範大学思勉人文高等研究院（上海）

⑪ 石井剛、敢問“天籟”：关於章太炎和劉師培哲学的比較研究、Intellectual Thought and Scholarship in East Asia: Zhang Taiyan and Late Qing Chinese Scholarship、2010.12.21-22、City University of Hong Kong

⑫ 石井剛、文化多様性中的当代儒家：以中国東北地区為例、International Workshop“Confucian Revival in Contemporary China: Preliminary Reports from the Fields”、2010.12.3、東京大学

⑬ 坂元ひろ子、以漫画資料探査中国現代社会文化史（中国語)、北京師範大学歴史学院講演会、2010.11.3、北京師範師範大学（中国、北京）

⑭ 晏妮、日本映画と1950年代の中国、日本現代中国学会、2010.10.17、中央大学

⑮ 村田雄二郎、中国ナショナリズムにとってのモンゴル（招待講演)、第３回ウランバートル国際シンポジウム「日本・モンゴルの過去と現在――20世紀を中心に」2010.9.9、ウランバートル大学（モンゴル、ウランバートル）

⑯ 石井剛、『荘子』斉物論的清学閲読：反思啓蒙的別様径路（中国語)、International Center for Critical Theory, Peking University Summer 2010 Workshop on “Rethinking Enlightenment in Global/Historical Contexts”、2010.8.25-26、北京大学

⑰ 加治宏基、中国の発展観とその外交インパクト、日本平和学会、2010.6.19、お茶の水女子大学

⑱ 加治宏基、国連開発ディスコースの『本土化』をめぐる中国の政策過程、日本現代中国学会、2010.6.5.摂南大学大阪センター

⑲ 石井剛、批評的漢学、漢学的批評、全球化時代的高等人文研究：北京大学-東京大学-ニューヨーク大学学術交流与合作懇談会、2010.1.11、中国・北京大学

⑳ 坂元ひろ子、Exploring avenues for Symbiotic Asia in history of Okinawa International Humanities Conference “Boundary-Crossing Humanities and Symbiotic Society”、2010.5.14、延世大学（韓国、ソウル）

21 石井剛、批評的漢学、漢学的批評、全球化時代的高等人文研究：北大-東大－ニューヨーク大学三辺学術交流与合作懇談会、2010.1.11、北京大学

22 坂元ひろ子、The impact of Versailles on the development of nationalism in China and cartoons as urban culture、Asia after Versailles,1919-1933 Symposium、2009.6.19、Japan Center of Munich University, Germany

23 坂元ひろ子、五四時期的女性主義及其思想来源、紀念五四運動国際学術研討会（中国社会科学院学部主席団・同近代史研究所主催、2009.5.4、中国社会科学院近代史研究所、北京

24 尾崎文昭、為二十世紀精英文学而争名―略談文学現代性的社会功能（中国語)、“五四”与中国現当代文学国際学術討論会、2009.4.23、中国、北京大学

〔図書〕（計１９件）

① 砂山幸雄（編）、岩波書店、新編原典中国近代思想史、第７巻（世界冷戦のなかの選択）、2011、410
② 孔祥吉、村田雄二郎、研文出版、清末中国と日本――宮廷・変法・革命、2011、362
③ 汪暉著、石井剛（訳）、岩波書店、近代中国思想の生成、2011、433
④ 佐藤普美子、汲古書院、彼此往来の詩学―馮至と中国現代詩学、2011、408
⑤ 並木頼寿、大里浩秋、砂山幸雄（共編）、研文出版、近代中国・教科書と日本、2010、456
⑥ 野村浩一、近藤邦康、砂山幸雄（共編）、岩波書店、新編原典中国近代思想史、第６巻（救国と民主）、2010、456
⑦ 村田雄二郎（編）、岩波書店、新編原典中国近代思想史、第２巻（万国公法の時代）、2010、351
⑧ 村田雄二郎（編）、岩波書店、新編原典中国近代思想史、第３巻（民族と国家）、2010、361
⑨ 高見澤磨、鈴木賢、岩波書店、叢書中国的問題群３　中国にとって法とは何か―統治の道具から市民の権利へ、2010、１-77
⑩ 晏妮、岩波書店、戦時日中映画交渉史、2010、294
⑪ 晏妮(共編著)、人文書院、ポスト満洲映画論-日中映画往還、2010、175
⑫ 晏妮(執筆分担者)、大修館書店、中国映画のみかた、2010、52-67、204-219
⑬ 晏妮(執筆分担者)、上海辞書出版社、娯悦大衆-民国上海女性文化解読、2010、288-306
⑭ 伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・バーロウ（共編）、岩波書店、モダンガールと植民地的近代-東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー、2010、117-150、313-317
⑮ 近藤邦康、砂山幸雄（５番目）、他 10 名、創土社、新中国の 60 年-毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続-　2009 年、107-133
⑯ 坂元ひろ子、研文出版、連鎖する中国近代の“知”、2009、343
⑰ 飯島渉、久保亨、村田雄二郎（共編）、東京大学出版会、シリーズ 20 世紀中国史、全４巻、2009、920（4 巻総計）
⑱ 木間正道、高見澤磨（３番目）、他２名、有斐閣、現代中国法入門［第５版］、2009、xvi+390
⑲ 久保亨、高見澤磨（５番目）、他９名、東京大学出版会、グローバル化と中国（シリーズ 20 世紀中国史　第 3 巻）、2009、81-99

６．研究組織

(1)研究代表者

砂山　幸雄（SUNAYAMA YUKIO）
愛知大学・現代中国学部・教授
研究者番号：00236043

(2)研究分担者

尾崎　文昭（OZAKI FUMIAKI）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：70126019
坂元　ひろ子（SAKAMOTO HIROKO）
一橋大学・社会学研究科・教授
研究者番号：30205778
村田　雄二郎（MURATA YUJIRO）
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：70190923
高見澤　磨（TAKAMIZAWA OSAMU）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：70212016
石井　剛（ISHII TSUYOSHI）
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：40409529
菅原　慶乃（SUGAWARA YUKINO）
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：30411490
（H21→H22 まで）
加治　宏基（KAJI HIROMOTO）
愛知大学・国際中国学研究センター・客員研究員
研究者番号：80553487
佐藤　普美子（SATO FUMIKO）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：60119427
（H22→H23 まで）
晏妮（AN NI）
明治学院大学・言語文化研究所・研究員
研究者番号：70509140
（H22→H23 まで）

(3)連携研究者

佐藤　普美子（SATO FUMIKO）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：60119427
（H21 のみ）
晏妮（AN NI）
明治学院大学・言語文化研究所・研究員
研究者番号：70509140
（H21 のみ）